

氏 名	さかぐち さとこ 坂 口 さとこ
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 4 5 3 号
学位授与の日付	平成 19 年 3 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	明治、大正期の京都における光琳派の受容 ー文献・作品展示の場・作り手から見た光琳派ー (主査)
審 査 委 員	教授 並木誠士 教授 石田潤一郎 教授 中川 理 名誉教授 太田喬夫

論文内容の要旨

本論文は、明治、大正期の京都における光琳派の受容について、当時の美術雑誌や美術学校、博覧会、博物館あるいは浅井忠、神坂雪佳といった作り手などの観点から考察している。一般に琳派と言われる俵屋宗達以降、尾形光琳を経て酒井抱一にいたり、明治期には東京を中心に展開する流派に対して、京都での受容の在り方を光琳派という語により、工芸や図案をも視野に入れつつ論を進めている。

第 1 部「文献に見る近代京都の光琳派」では、京都美術協会の発行する『京都美術協会雑誌』を中心に、美術雑誌に表れる光琳関係の記事を抽出し、そこから光琳評価の変化を読み取っている。具体的には、明治 30 年代から 40 年代へかけて光琳への興味と評価が高まったことが分析され、その変化が社会背景と連動している様相を明らかにしている。

第 2 部「作品展示の場から見た光琳派」では、京都博覧会、京都府画学校、京都国立博物館を取り上げ、作品展示の場と教育現場における光琳派受容の実態を分析している。ここでは、明治期初頭の京都画壇においては、光琳派が決して主流ではなかったことが確認されている。一方、美術工芸界においては、新しく捉え直された光琳が新しい図案創出という文脈において注目されていたことも、対比的に明らかにされている。

第 3 部「作り手の立場から見た光琳派」では、まず、近代京都において光琳派作品をもとにして実際に美術工芸を作っている浅井忠、神坂雪佳の作品の意匠と光琳派のかかわりを分析し、両者の光琳派受容の実態の相違を明らかにしている。また、京都の老舗呉服店千總の図案を取り上げ、染織界における近代の光琳模様の特徴を考察している。

以上のように、本論文は、尾形光琳の江戸移住、酒井抱一の江戸での活躍により、江戸時代後期以降、江戸を中心に展開している琳派がそのまま現在の東京中心に語られているのに対して、京都での様相を詳細に分析している。それにより、絵画中心の東京での琳派受容に対して、美術工芸全般にわたり、さらに図案をも視野に入れるという、東京とは異なる京都における光琳派受容の実態が明らかになっている。

論文審査の結果の要旨

近代美術研究全体の方向性でもあるが、現在の琳派研究、とくに江戸時代後期以降の琳派の展開についての研究は、江戸ー東京中心、絵画中心に進められている。このような視点から欠落しているのが、京都における俵屋宗達、本阿弥光悦、尾形光琳らの作品受容の実態であり、とくに工芸や図案をも視野に入れた伝統産業とのかかわりという観点である。本論文は、そのような欠落を補う研究として第一の意義を有する。

また、受容の実態を明らかにするために、明治・大正期の京都で発刊された美術雑誌を丹念に読み込み、そこから浮かび上がる光琳派観の変化を分析すると同時に、当該時期の美術学校のカリキュラムや博覧会、博物館での展示における光琳派のあり方を当時の資料から再現している。それにより、受容の主体が美術教育や博物館という場ではなく、むしろ地場産業というより日常的なレベルであったことが明らかになっている。この点が本論文の第二の意義である。そして、上記の観点から浅井忠と神坂雪佳という、京都の伝統産業に深くかかわった指導者二人を取りあげ、両者の光琳派受容の微妙なずれを詳細に浮かび上がらせている。

以上のように、本論文は、これまで東京中心、絵画中心の視点から論じられ、ある意味で論じられ尽くしているともいえる琳派に対して、京都という場にこだわり詳細な分析をおこない、地場産業とのかかわりという新しい視点を呈示することに成功している。その点で本論文を高く評価することができる。

なお、本論文の内容の一部は、申請者による下記の学会誌の査読論文 2 編として公表されている。

① 坂口さとし「京都美術協会雑誌に見る明治期・大正期の京都における光琳派について」

『デザイン理論』（意匠学会誌）46 号（2005 年）

② 坂口さとし「明治、大正期の京都における光琳派作品の位相―意匠の視点から―」

『デザイン理論』（意匠学会誌）49 号（2006 年）